

JICA 教師海外研修 学習指導案・授業実践報告書

【実践者】

氏名	陣野 俊彦	学校名	東京都立大島海洋国際高等学校
担当教科等	外国語（英語）	対象学年（人数）	2年 A 組（23名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2020年 9月 ～12月（11時間）		


【実践概要】

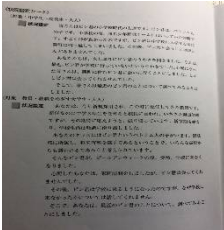
1. 実践する教科・領域※教科、総合的な学習の時間など。：国際理解		
2. 単元(活動)名※教科書等の記載を参考に記入ください。：なし		
3. 授業テーマ（タイトル）と単元目標 授業テーマ※評価規準を意識して設定ください。：「多民族二ホン 多文化共生社会への第一歩」 絶対から相対へ、国際（くにのきわ）理解で自分事化へ 単元目標※教科書等の記載を参考に記入ください。： 日本の中にある“国際”を知り、自身の価値観を相対化させる。自分たちが住む日本、東京の姿を知り、多文化共生の姿勢を育む。 関連する学習指導要領上の目標※学習指導要領から引用ください。： 多文化共生をテーマに体系的な国際理解教育の実践を目指す		
4. 単元の評価 規準	①知識及び技能	多分共生社会の実情を知り、他者とグループワークなどで意見を交わすことができる。
	②思考力、判断力、表現力等	多文化共生社会実現に向けての葛藤や課題を文章の形で表現できる
	③学びに向かう力、人間性等	自身の意見のみを押しとおすことなく、他者の意見を尊重しながらグループの意見を集約できる。

<p>5. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)</p>	<p>【単元設定の理由】</p> <p>昨今ヘイトスピーチやネット右翼によるSNS上での暴言など、外国人に対しての差別は目に余るものがある。それらの課題に対し、教育活動上でできる対策は何かないかと思索していた。本研修で多文化共生の街、鶴見区をフィールドワークで訪れた際、鶴見を教材に生徒に多文化共生を促す授業実践をしようと決意し、本単元を設定した。</p> <p>【単元の意義】</p> <p>マイノリティーの人たちと暮らす多文化共生社会において、他者に思いを馳せることは重要な資質である。ロールプレイやグループワークを通じ、上述の課題に取り組み、振り返りを続けることで、社会的情動性知性などを育むことが期待できる。</p> <p>【児童/生徒観】</p> <p>本校は2年時から海洋科と国際科に分かれる。2A国際科の生徒は大学進学を目指す生徒も多く、活動に対しては前向きである。しかしながら議論に熱中し、意見の異なる級友に激昂してしまう生徒がいるなど、本単元を通して他者の意見を尊重する力を伸ばしたいと考える。教室の中での多文化共生も喫緊の課題である。</p> <p>【指導観】</p> <p>グループワーク、ロールプレイ、発表活動を重視し、活動後教員が知識の補充をする。基本的に教員はファシリテーターとして、生徒の活動を促す。授業の終わりに振り返りを行い、次週教員がその振り返りに対しフィードバックを行い、生徒の思考の変化に気づきを得よう工夫する。</p>
--	--

6. 単元計画 (全時間)

※全体の総時間数や「本時」の記入場所は適宜変更ください。ただし、4時間程度を目安に長くなり過ぎないように計画ください。

時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など ※: JICA リソース 活用はこちらに記載
1	北朝鮮拉致被害について	拉致被害の映像を視聴し、日本側から見た朝鮮のイメージを一部理解をする。	東京都人権教育プログラム記載の政府インターネットチャンネル「めぐみ」を視聴し、拉致被害の実情を知る。	
2 3	在日韓国朝鮮人について	ヘイトスピーチなどの現状をとらえ、朝鮮人1人1人が日本に行き、共存していた事実に思いをはせる。日本で多文化共	ヘイトスピーチなど共生とは逆を行く流れがあることへ思いをはせながら、どのように韓国・朝鮮人が日本に来て生活してきたかを理解する。自分たちの住む東京で、韓国・朝鮮人の居住区について調べる。	

		生社会の実現を考える。		
4 5 6	在留外国人への厳しさを知る	在留外国人への在留資格の厳しさを知る 在日外国人が持つ言語・文化上の葛藤を知る 日本文化の独特さに気づく 外国人から見た日本語の難しさを理解する	1人1人が在留外国人役になり、掲示されているアルバイトに応募できるか調べる。応募できる場合、できない場合はどのような規則が適応されているのか、理解を深める。 1、2限で学んだ韓国朝鮮人への労働環境と比較し、100年たっても抜本的な解決には至っていないことに気づく。 「ビン君の悩み」のワークを通し、ビン君が直面する困難に対する解決策を皆で考える 学校での掃除の時間、国で掃除をする立場にない生徒に掃除をさせるべきか、させないかを議論する。 中学校で日本語が分からず進路を実現することができない女子生徒に、周囲の大人役となりロールプレイで課題解決を図る。	
8 9	震災時に実際に起きた外国人へのトラブルを解決する		震災時に外国人が困っている例を通し、課題解決方法を提案することで被災時の多文化共生を考える。	
10	ちがいを違いとして認識する尺度をグループ内で比較する		ちがいのちがいカードを使って神経衰弱をする。その違いが許せるのか許せないかをグループで議論しながら、互いの価値基準について理解を深める。	
11 (本時)	国際理解とは何かとの本質的な考えを深める		多文化共生の街、鶴見の成立背景と具体的な共生方法を提示し、今後の多文化共生社会と自身の国際感覚について再度思考をする。	

7. 本時の展開（1時間目）

本時のねらい：国際理解とは何かとの本質的な考えを深める

※1: 過程の「導入」・「展開」・「まとめ」は適宜変更下さい。

※2: 「本時の展開」を複数時間分作成されても構いません。その場合、「7. 本時の展開」および「8. 評価基準に基づく本時の評価」を複製・追加して記入ください。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動 ・指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料 (教材)
<p>「導入」 (10分)</p> <p>(15分)</p> <p>「展開」</p> <p>(5分)</p> <p>「まとめ」</p>	<p>1~10 時間目の授業の振り返り。授業の振り返りごとに、自身の価値観や考えがどのように変化をしたのかプロセスをたどる。</p> <p>授業ごとに多文化共生を理解する上でのキーワードとなる言葉をスライドに提示し復習を行う</p> <p>質問 1：日本で外国にルーツを持つ人たちと一緒に暮らしていく中で、大切なことは何ですか？をワークシートに記入、グループでシェア、代表者が発表する。</p> <p>日本も海外移民を推奨した史実を学び、それがなぜか考える。また沖縄、ボリビア、鶴見との関係を捉え、鶴見で多文化共生社会が形成されていることを学ぶ。</p> <p>多文化共生社会のために必要なことをプリントに記述する。</p> <p>日本人だからとこだわるが、沖縄からボリビアに移住し、日本語が話せない人たちも日本人である。日本人とは何か問う。</p>	<p>プリントの記述</p>	  

8. 評価規準に基づく本時の評価方法

振り返りシートの記入：1~10 時間の授業を受けた振り返りと、本時の授業の振り返りを通して、自身の多文化共生や国際理解に対して、どのような思考の変化があったのか、まとまった文章で記述することができる。

<p>9. 学習方法及び外部との連携</p> <p>ロールプレイやグループ分けはメンバーが同じにならないよう、ランダムに構成した。様々な級友と意見を交換することにより、まず学級の中に意見を尊重する態度を養い、教室内での多文化共生を目指したからである。</p>
<p>10. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取り組み</p> <p>1 点目にザンビアのバナナで作られた名刺を持ち、常に配る。ほとんど人は興味をもってくれ、国際理解の話題になる。</p> <p>2 点目に職場の湯茶飲み場に佐藤先生の探究 BOOKなどを置き、読んでいる人がいたら声をかける。</p>

【自己評価】

<p>11. 苦労した点</p>	<p>在日韓国朝鮮人を扱う際に自身の発言に思想面での偏りがでないか非常に難儀した。この話題を扱ってもらいたくない生徒もいることを想定し、担任に生徒のルーツやアイデンティティをあらかじめ聞き授業に臨んだ。</p>
<p>12. 改善点</p>	<p>国内研修や自身が見聞きした事柄を詰め込みすぎ、生徒が考える時間や意見を記述する時間を十分にとることができなかった。また授業の終盤は教員が講義をする場面が多くなり、相互性にかけた。</p>
<p>13. 成果が出た点</p>	<p>毎週国際理解の授業実践を重ねる中で、生徒の感想の質に変化が出た。理解や尊重だけではなく、妥協できる部分とそうではない部分を自分の中で確立し相手に伝える。その上でお互いにベストな手段や案を考えることが大切など、議論にも慣れてきた。</p>
<p>14. 学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 国際理解で外国人と共生していくためにはどうすればよいかなど、様々な問題がとりあげられ、自分なりに正解を見つけていましたが、講義を聞いてその自分の中で見つけた答えは本当に正しいのかという疑問が芽生えた。実際に授業で扱う問題に直面したことなく、狭いコミュニティーで生活しているので、自分の思う正しい答えを違う視点で見れば、間違っただけのものになると感じました。

<p>15. 授業者による自由記述 (教師海外研修に参加した本学習指導案作成者として、他の教員へのメッセージなど)</p>	<p>国際理解の授業を特別番組にせず、毎週続けることの大変さ、大切さを感じたことは今までなかった。教科書がなく1から授業を準備する大変さは想像していただきたい。しかし大型書店には少数ではあるが、ワークショップ式の国際理解実践本が売られている。毎月大型書店を回り、購入し実践するのはこれは楽しい時間であった。研修内容で伝えたい内容はある程度固まっていたので、それを伝えるために有効な手立てを10時間分用意し実践をした。10時間の実践はもちろん苦痛も伴ったが、発表時の生徒の発言や振り返りで生徒の変容を見ることができ、実践をしてよかったと心から思った。ただし評価や振り返りをポートフォリオ化し、思考のプロセスを明確にするなど、課題も非常に多く残った。</p>
---	---

参考資料：

- ・ 大谷泰照(2007) 日本人にとって英語とは何か 大修館書店
- ・ 開発教育研究会(2012) 身近なことから世界を考える授業 明石書店
- ・ 外国につながる子供たちの物語編集委員会(2020) クラスメイトは外国人課題編、入門編 明石書店
- ・ 金時鐘(2014) 朝鮮と日本に生きる 岩波新書
- ・ 倉八順子(2016) 対話で育む多文化共生入門 明石書店
- ・ 高柳俊男(1996) 東京の中の朝鮮 明石書店
- ・ 多文化共生のための市民社会性教育研究会(2020) 多文化共生のためのシティズンシップ教育実践ハンドブック 明石書店
- ・ 藤波海 (2020) 沖縄ディアスポラ・ネットワーク 明石書店
- ・ 沼尾実(2020) 多文化のまち鶴見・潮田地区